

探究のエッセンスを維持して、 自校のスタイルを確立する

探究的な学習は、多くの教師がその重要性を理解する一方で、導入に様々な課題を感じている。(P.5参照)
時代が求める新しい学びを実現していくためのポイントについて、先進校の教師と「学び」の研究者に聞いた。

探究的な学習とは 自分なりの答えを探す活動

木村 まず、高校における探究的な学習とはどのような活動なのか、改めてお聞かせいただけますか。

飯澤 本校の場合、例えば新入生に対しては、「探究とは、答えがすぐに見つからなかったり、答えが複数あったりするテーマに対して、自分なりの答えを探していく活動である」と説明しています。また、探究の対象となる課題は、生徒自らが自分の興味・関心に応じて設定していくことが理想ですが、生徒の力だけで課題を設定することは簡単ではありません。そこで、必要があれば教師も一緒に考えて課題について考え

ます。課題は一度設定したら変えられないというのではなく、探究を進める中で見えてきたことや、新たに芽生えた自分の興味・関心に応じて設定し直しても構いません。課題の再設定という経験を通して、課題の立て方を理解させています。

松下 探究的な学習が求められるようになった背景には、課題を解決させるだけではなく、生徒自身に解決すべき課題を発見させたいという思いがありました。ただ、課題の設定は、ディスカッションやフィールドワークなどを積極的に行い、多様な世界に出会ってはじめて可能になります。大学生でも課題設定には苦労します。ですから、課題設定を生徒だけで行うのか、それとも教師がサ

ポートしながら行うのかは、その学校の生徒の状況によって決めればよいと思います。ただし、課題を設定してから結論に至るまでの論証や実験といったプロセスは、生徒自らが進めていくことが大切です。

木村 学習指導要領では、総合的な学習の時間（以下、総合学習）だけでなく、教科学習の中でも探究活動を行うことが求められています。総合学習と教科学習の2つの場面で展開される探究に違いはありますか。

飯澤 例えば、理科の探究であれば、法則を再発見させる活動が考えられます。教科書を閉じ、地動説はなぜ正しいのか、自分の知識や過去の経験を基に論証をしていく活動も探究の1つでしょう。総合学習で行

われる探究と比べても、プロセスを体験し、探究的な考え方を身に付けるという点では同じです。ただ、教科学習には、教科書を進めなくてはならないという現実的な問題もありますから、どの単元でどんな探究活動を入れるのか、探究と習得のベクトミックスを模索することは本校の教科指導でも重要な課題です。

松下 大学でも全く同じことが言えます。探究的な活動やアクティブ・ラーニングはそれ自体時間が掛かります。その分、授業時間外での学生個々の学習が重要になります。つまり、探究的な活動を通して、授業外でも自ら学習をしたくなるような学びのモチベーションを高めていくことが求められます。

京都市立堀川高校の 探究的な学習活動について

1年次から段階的に 探究する力を育成する

京都市立堀川高校は、「総合的な学習の時間」を中心に「探究基礎」を設置。「探究基礎」では、教育目標の1つである「探究する力」の育成のため、情報取得の基礎学習から問題解決の体験を経て論文作成に至る取り組みを行っている。活動は3段階に分けられ、1年生前期を探究の「型」を学ぶ期間、1年生後期を「問題発見・解決能力」及び「事実・記述・他者の主張を多面的・批判的に検討し、論理的に考察する力」を身に付ける期間、2年生前期を教師の指導の下、実際に探究活動を行い、発表会などでアドバイスや批判を受ける期間と位置付けている。活動の評価は、「興味・関心を持つ力」「課題を設定する力」「課題を解決する力」「他者に表現する力」の4観点で行われる。

探究活動を進める際、心に留めておくべき「探究五箇条」として、「知らないということを知れ」「常識を学べ」「常識を疑え」「手と頭を動かせ」「とも朋と愉しめ」を掲げている。

飯澤 ある生徒が私に「三角関数って、必要なものなんですね！」と言ったことがあります。これまでの授業での学びだけであれば、三角関数を用いた数学の学習以外の場面で使うことはなかったかもしれません。しかしその生徒は、探究活動の中で自分の課題解決のために三角関数を使ったのです。そうした経験が、生徒の教科の捉え方を変え、教科学習への意欲を高める例は少なくありません。



京都市立堀川高校
飯澤 功 いざわ・いさお

教職歴11年。同校に赴任して12年目。企画研究部部長。担当科目は地学。
京都市立堀川高校◎1908（明治41）年創立。14年度入試では、国公立大は、東京大、京都大、大阪大などに167人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ344人が合格（現浪計）。

正解を教える役割から 試行錯誤を支援する役割へ

木村 学習者が主体的に学びのプロセスを体験するためには、探究学習において教師は生徒にどのような支援をすればよいのでしょうか。

松下 学びが探究的であるほど、試行錯誤が求められるのは、高校生も大学生も同じでしょう。研究が想定通りに進まない時こそ、今自分がど



京都大学高等教育研究開発推進センター教授
松下 佳代 まつした・かよ

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士（教育学）。専門は教育方法学、大学教育学。京都大学教育学部助手、群馬大学教育学部助教授等を経て、2004年から現職。著書に『パフォーマンス評価』（日本標準）、『ティープ・アクティブラーニング』大学授業を深化させるために』（編著・勁草書房）など。

のようなプロセスを進んでいるのかを理解する必要があります。教師に求められるのは、生徒の探究の流れを見通した上で、今どこで、どのようなことにつまずいているのかを把握し、適度に手を差し伸べるかわかりだと思えます。

木村 正解に最短でたどり着く方法を教えることに使命感を強く持っている先生方は少なくありません。教え過ぎずに、適度に手を差し伸べるというのには、簡単なことではないと思います。

飯澤 本校に赴任してきた先生方には、「探究学習においては、生徒に答えを教えないでください」とお願いしています。生徒は、分からないことは教師に聞けば教えてもらえると思っていて、実際、本校の生徒でも1年生のうち「テーマはこれで大丈夫ですか?」「この後どう進め



ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室室長
東京大客員准教授
木村 治生
きむら・はるお

*プロフィールは2015年3月時点のもので

ればよいのですか？」とよく聞いてきます。そのような時は「君は大丈夫だと思う?」「どう進めればよいと思う?」と、そのまま生徒に聞き返すようお願いしています。ただし、答えは教えないけれども、「自分が同じ研究をするならどうするか」を考えて、探究を進める上で見逃せないキーワードの提示や参考文献の紹介は積極的に行ってもらうことで、次第に生徒は主体的に探究に取り組みようになります。

松下 学びが探究的になるほど、活動を見通す教師の存在は大きくなりますよね。また最近、調べ学習の発表では「コピペ(*1)」が横行していると言われています。探究活動に取り組むのは良いことだけれども、「ネットで調べて、まとめさえすればよい」といった誤った考え方を身に付けてしまっているケースも少なからずあります。まず教師自身が、探究とはどのような学習活動なのかを理解し、指導することが重要です。**飯澤** 生徒たちには悪意がない分、「コピペ」は非常に根深い問題です。だからこそ、「コピペはカンニングと同じだ」と強い指導を行うと共に、



「学びのプロセスを見通しながら生徒に『君はどう思う?』と問い掛けていきます」**飯澤**

「コピペ」と「引用」の違いなどをしっかり説明しています。同様に、研究成果のねつ造は詐欺と同じであり、科学を停滞させるという意味で社会に対する罪である本校でも指導しています。

学びのプロセスを 入試は評価し始めている

木村 大学入試とのかかわりはどうでしょう。探究と習得をどうベストミックスしていくかということでは、学校現場での重要な課題です。**飯澤** 先ほども申し上げた通り、探究学習によって、生徒の教科学習への意欲が高まることを実感しています。また、校内調査では、探究学習への取り組み状況と、取り組み後の国語、英語の学力の伸びに相関があることが分かっています。**松下** 堀川高校でも、2年生前期で教育課程上は探究学習は終わりです

よね。大学入試のことを考えなければ、本当は3年生まで探究学習を続けさせたいところです。

飯澤 それは私たちにとって長年の課題でした。これまでは「2年生前期まで」という判断がベストミックスだと思っていました。それが以降も探究を続けたいと強く願う生徒がいるのは事実です。実際に、自主的なゼミを開いている生徒もいます。そこで、2年生後期以降、生徒が自主的に行う探究活動に対して、活動場所と費用を支援する制度をつくりました。40人ほどがそのような取り組みに参加しようとしています。**松下** 大学の中にも、「高校時代に探究学習に取り組んできた生徒が、受験勉強のために探究学習を中断させられることなく、そのまま探究学習を継続させながら大学に入れるように入試を改革したい」と考えている教員は少なくありません。飯澤先

生は、昨今の大学入試改革の動きをどのように見ておられますか。

飯澤 改革の流れを評価した上で、あえて申し上げるならば、生徒の活動の評価を海外コンテスト入賞などと規定してしまうのはもったいないと思います。外部評価は確かに大事だと思いますが、テーマによっては科学オリンピックに出た生徒しか評価されなくなってしまう。生徒一人ひとりの探究のプロセスに目を向けた、独自の評価方法を大学には確立してほしいと思います。

木村 お茶の水女子大の新型AO入試(*2)など、手間を掛けて「学ぶ力」を見る入試も生まれつつあります。

松下 京大の特色入試もそうですが、かなり定員を絞っていますよね。日本の大学は入試選抜の専門家が少ないので、パフォーマンス評価を定員全体で実施するのは現実的にはまだまだ困難です。ただ、定員の一部分であっても、そうした入試の存在は、社会に対するメッセージにはなると思います。

飯澤 あくまで理想ですが、探究学習の指導が資格化されるなどして、高校が探究活動の評価方法・基準を

*1 コピー・アンド・ペーストの略語。文章やデータなどを複写・複製(コピー)して、それを他の場所に転写・貼付(ペースト)すること。
*2 書類審査による第1次選考後、模擬授業やグループ討論・実験など3日間に及び第2次選考を行う(新フンボルト入試)。2017年度入試から導入。



ある程度統一して大学に提出できれば、大学も選抜の負担が少なくなり、高校にとっても、探究活動を評価できる教師が増えることはプラスなはず。

学力の必要性を 探究の中で気付かせる

木村 探究学習は、指導する教師にもメリットがありそうですね。学び

が探究的であるほど生徒は試行錯誤するというお話もありましたが、探究学習を支援することは、教師の指導力の向上にもつながります。

飯澤 指導力の向上だけでなく、生徒理解もとても深まります。探究学習における生徒との対話を通して、生徒の興味・関心を引き出す力も向上します。そして、探究の過程や発表の場面で、生徒の成長を目の当たりにすることで、教師としてのモチベーションが大きく高められます。

松下 大学で、FD（ファカルティ・ディベロップメント）（*3）がうまくいくのは、大学教育の改善を通じて、教員が学生の成長を実感でき、それが更なる改善につながる場合です。ただ、高校生の成長が実感できる場面は、探究学習だけではありませんよね。部活動や学校行事、あるいは入試実績で、生徒の成長や指導のやりがいを感じる先生もいるでしょう。どの場面での生徒の成長に最も喜びを感じるかは、先生によって違っていいと思います。

飯澤 本校は、探究学習に学校と

して力を入れていますが、海外研修や中学校向けの学校説明会、自主ゼミなど、生徒が主体的に活動する場面は他にもたくさんあります。探究で大切にしている力は、学校生活の様々な場面でも生きています。

木村 高校現場で探究学習を導入できない理由として、生徒に十分な学力が身に付いていないことを挙げる先生もいらっしゃいます。

飯澤 土台となる学力が高いほど、テーマの幅やアプローチの選択肢が広がります。しかし、「学力が高くはないから探究が出来ない」と考えるのではなく、「学力が高ければ、こういう活動も出来るようになる」と生徒に気付かせたいですし、それが教科学習への意欲にもつながります。探究のプロセスから生徒が学べかどうかは、生徒の学力以上に教



「学びのテーマが自由になるほど探究のエッセンスを維持できるかがとても重要になります」**松下**

師の指導力によると私は思います。

松下 探究のテーマはポップカルチャーでもダンスでもよいのです。それらが大学の研究テーマになるように、生徒が興味・関心を持つテーマでも探究学習は十分に可能です。高校の先生方も、「探究テーマ＝学術研究的なテーマ」ととらわれないでいただきたいと思います。そして、テーマが自由になるほど、探究のプロセスが重要であることに気付くはず。探究のエッセンスを維持しながら、生徒や学校に合った活動を考えたいですね。

飯澤 課題設定とその解決の過程を楽しむようになることは、課題の多い現代社会を主体的に生き抜く力の育成につながります。探究学習を通して、主体的に人生を歩んでいく生徒を育てたいと思っています。

*3 教員相互の授業参観、授業方法についての研究会など、教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取り組みの総称。